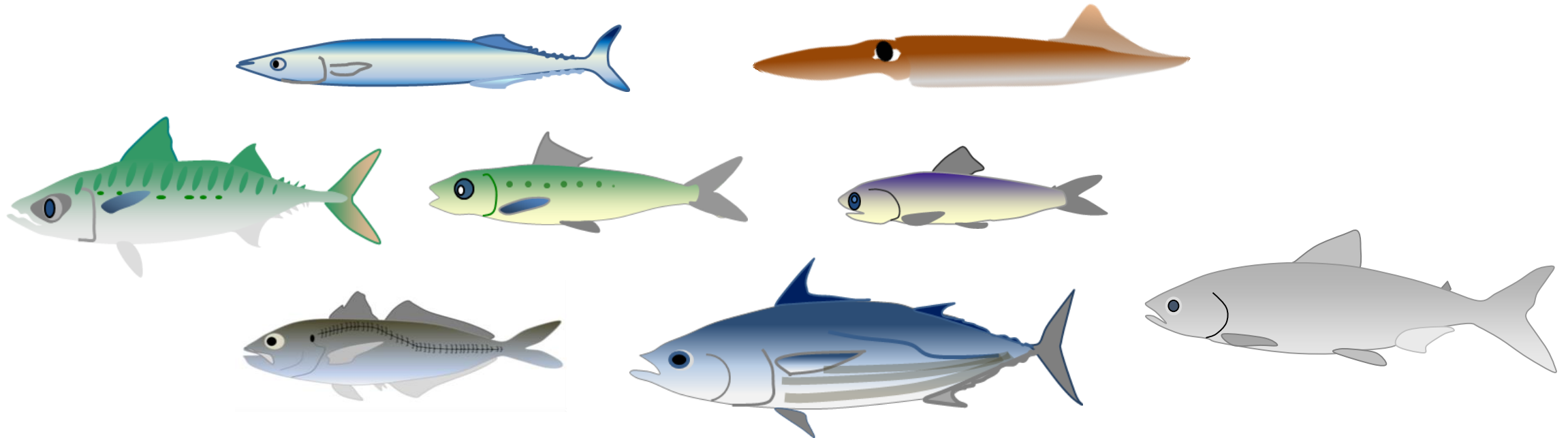


我が国の主要魚類水揚量と価格の動向： 2017年を振り返って



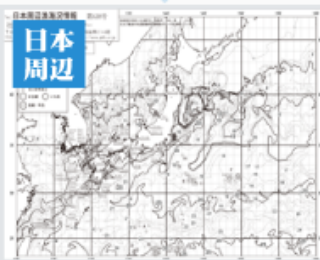
一般社団法人 漁業情報サービスセンター (JAFIC)



概 要

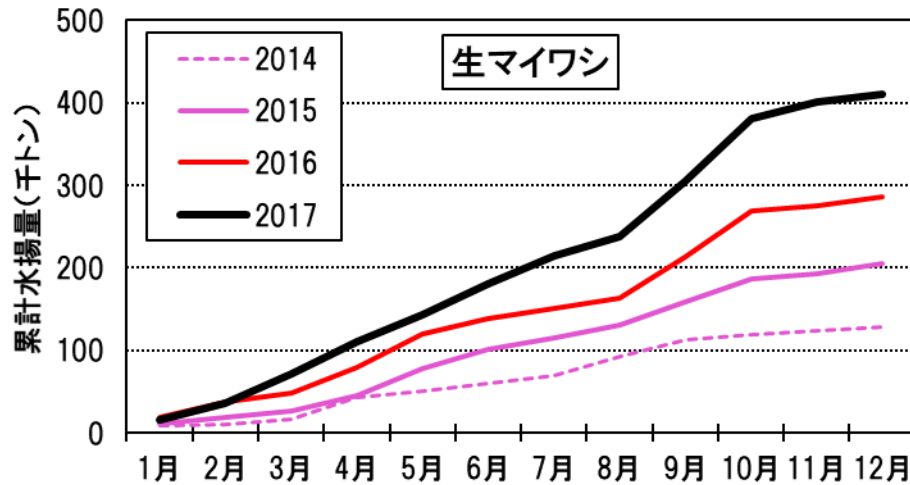
- 漁業情報サービスセンター（JAFIC）では、ホームページ「おさかなひろば」で、全国主要港における市況情報などを公開しています（下図）。
- ここでは、JAFICが漁況・海況情報の主対象としている重要浮魚類について、市況情報等をもとに、2017年の水揚量を過去3～4年間と比較するとともに、資源評価における「動向」と比較しました。また価格の動向について、考察しました。

※ここで示す水揚量は、JAFIC主要港における集計値を使用

TOP	ご利用ガイド	日報	月報	年報	統計情報	アーカイブス	関連情報
本日の水揚げ情報 平日16時頃更新 市場別・魚種別水揚げ速報	お知らせ vol1828「高知での水産関係者との意見交換会」を掲載しました。トピックスよりご覧ください。(12/28)	会員登録について ■ 上段の「ご利用ガイド」の「新規会員登録」をクリックして登録して下さい。 ■ 「おさかなひろば」は平成25年4月よりJAFIC正会員・賛助会員の方を除き有料会員制（年額3000円「税込3240円」）となりました。	毎週月曜 9時頃更新 日本周辺  日本周辺漁海況情報 過去のデータ ◇イワシサバ漁況・市況情報◇ ◇スルメイカ漁況・市況情報◇ ◇サンマ漁海況情報◇ ※魚種報は見本として週1回掲載 お申込み方法等はこちらへ				
水産物流通調査 毎月更新 産地水産物流通調査 / 冷蔵水産物流通調査	イベント情報 new おさかなひろば無料お試しキャンペーン実施中です。詳細は、ご利用ガイドの「会員になるには」をご参照ください。	トピックス vol1828「高知での水産関係者との意見交換会」水産関係者との意見交換会「カツオの資源状態と漁況予報をめぐって」が99名の参加で得て… 続きは こちらから					
JAFIC Japan Fisheries Information Service Center 一般社団法人 漁業情報サービスセンター	Q.「おさかなひろば」とは… A. 水産業界の方や日本の漁業に興味をお持ちの方を対象とした、会員制の水産情報サービスです。 A. 全国の主要産地市場と消費地市場の最新情報がごらんいただけます。 A. 日々更新される情報と週単位・月単位・年次単位で更新される情報があり、いずれも簡単な操作で閲覧・出力してご利用いただけます。						
水産流通ポータルサイト 国産水産物流通促進事業							
水産物市場月報 毎月更新 水産物流通情報発信・分析委託事業							
news JAFIC EYE ■ 銚子駐在員報告							

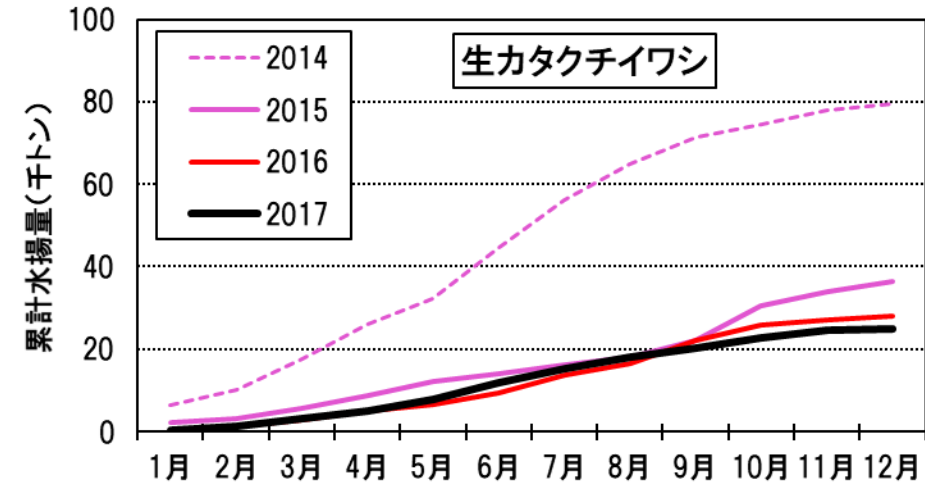
I. 2014～2017年の主要浮魚類水揚量の動向

①マイワシとカタクチイワシ（生鮮）



水揚量は年々増加し2017年は40万トンを超えました。これは、特に太平洋系群で近年加入量が順調に伸びている一方で、漁獲圧も低めに推移したためとされます。ロシア海域で禁止された流し網代替漁業として行われた道東の棒受網などでも大型魚が好漁でした。

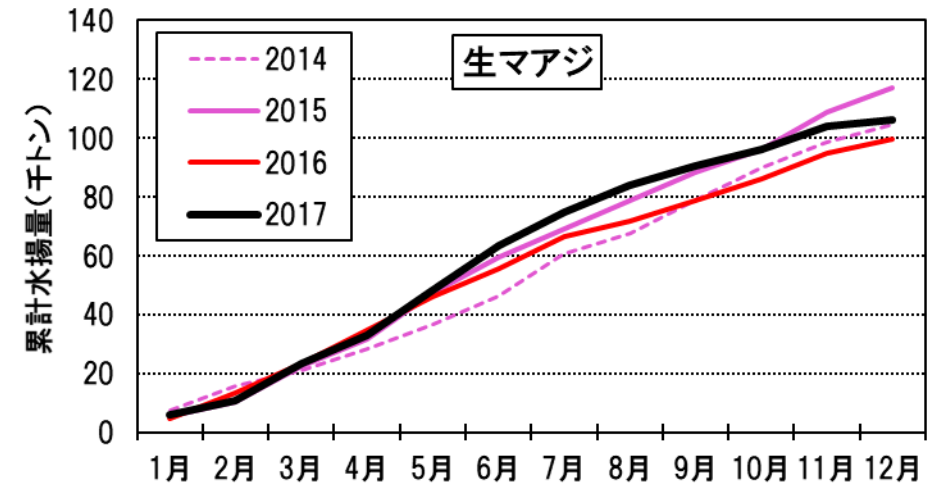
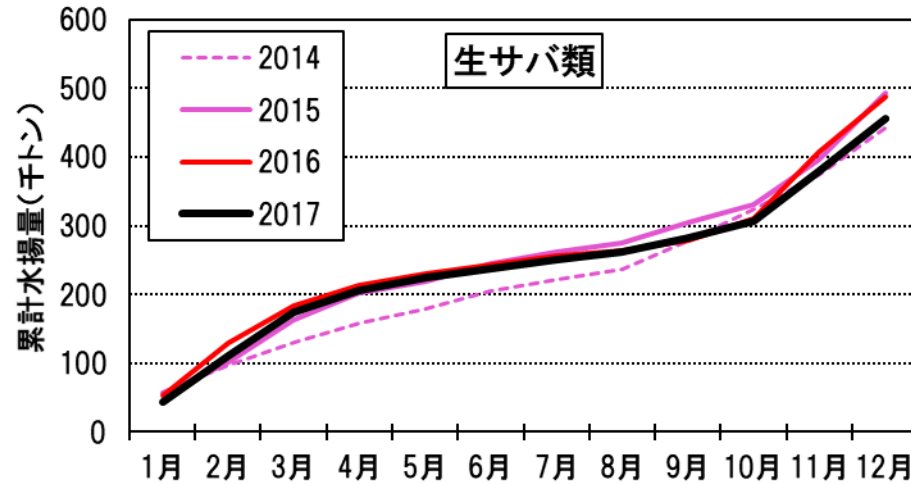
2017年410,620トン（2016年比144%）



水揚量は2014年に比して2015～17年は約1/3となり、2017年は近年では最低の2万4千トンでした。これはカタクチイワシ水揚量の半分以上を占める太平洋系群の資源量が減少しているためとされます。カツオ竿釣り漁業への活餌供給にも支障をきたしています。

2017年24,779トン（2016年比89%）

②サバ類（マサバ・ゴマサバ）とマアジ（生鮮）



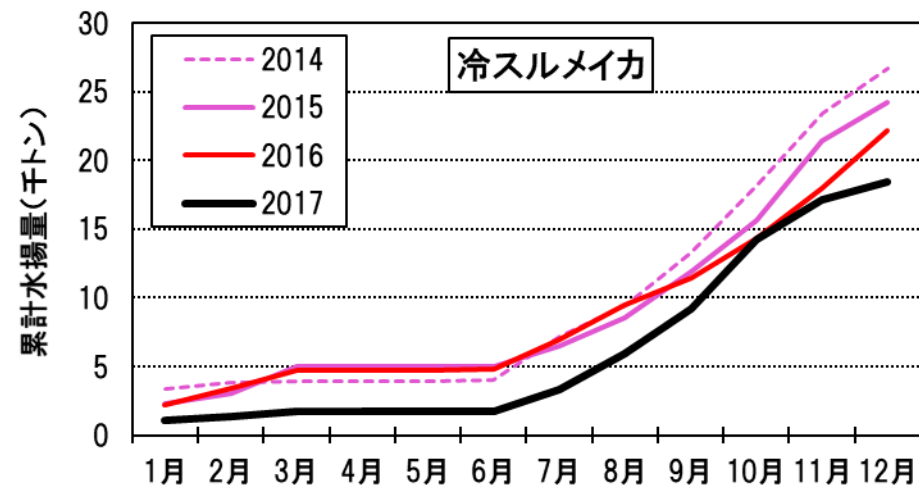
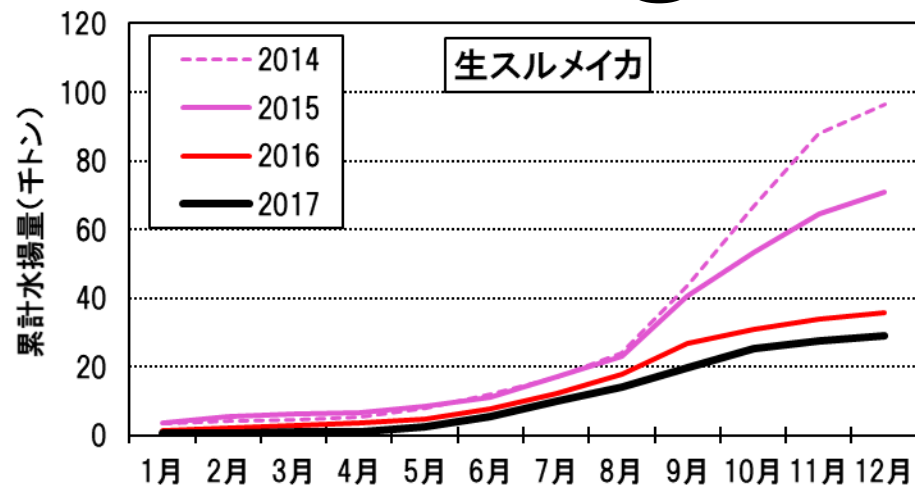
近年の水揚量は好調に推移し、2017年は15～16年にわずかに及びませんでした。これは、サバ類の近年の資源量の約半分を占めるマサバ太平洋系群の卓越年級群（2013年級など）が成長は遅いものの順調に漁獲されたのに対し、ゴマサバが減少したことが主要因と考えられます。マサバ太平洋系群は外国船（含：IUU）により公海域で多獲されており、これも懸念材料です。

2017年456,591トン（2016年比94%）

資源の動向は系群により異なりますが（太平洋系群で減少、対馬暖流系群で増加）、水揚量は他魚種に比して安定しています。昨年は山陰は低調でしたが、東シナ海は安定して漁獲され、大型魚も目立ちました。

2017年106,083トン(2016年比106%)

③スルメイカ（生鮮と冷凍）

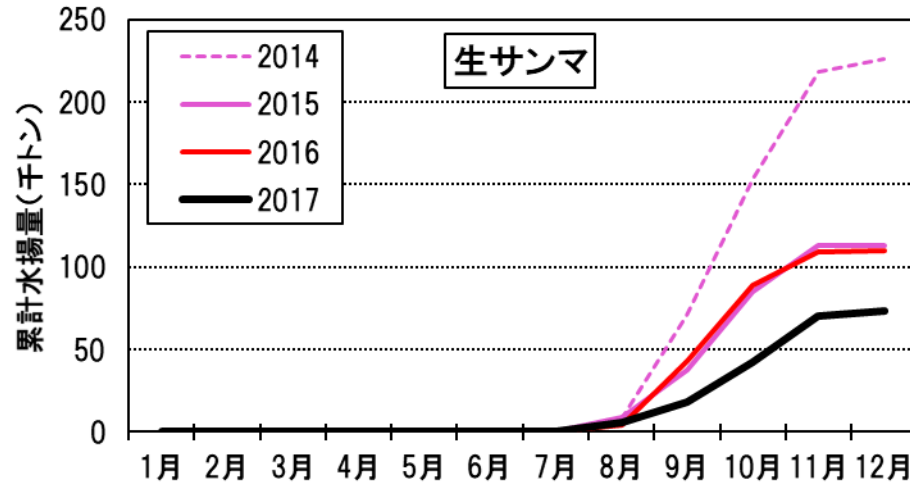


生鮮は水揚げ量が激減した2016年よりも少なく、冷凍も終盤の伸びを欠き昨年を下回りました。スルメイカは寿命が1年で、秋生まれ群（主に日本海を回遊）と冬生まれ群（主に太平洋を北上し日本海を南下回遊）から構成されます。平成28・29年度の資源評価では、両系群とも資源動向が「減少」でした。特に冬生まれ群の減少が顕著です。また、日本海の高水温化に伴い、日本海での南下ルートが北よりにシフトし、日本漁船が漁獲しづらくなったこと、産卵期の遅れに伴う魚体の小型化や外国船（含：大和堆周辺における北朝鮮による違法操業）による漁獲なども影響していると考えられます。釣・まき網が低調な中で三陸の沖底では、ややまとまった水揚げが見られました。

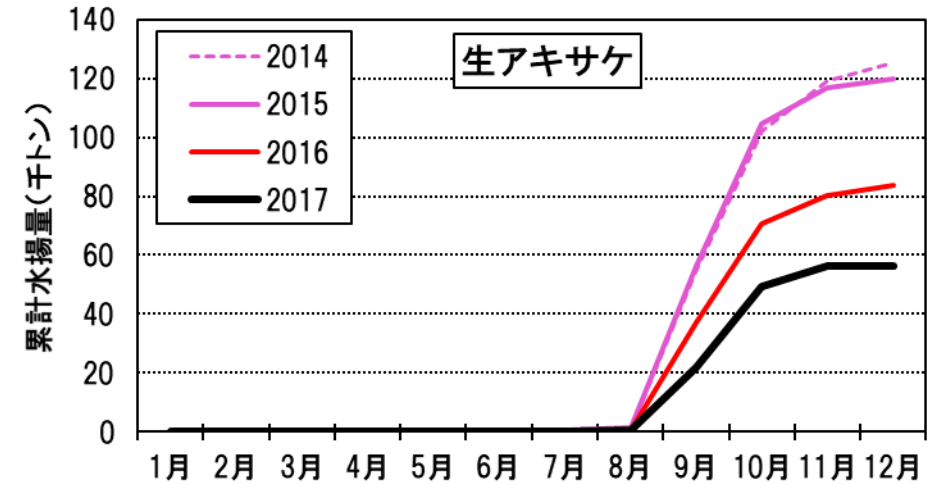
生鮮＋冷凍 2017年47,619トン(2016年比82%)

生鮮：2017年29,144トン(2016年比81%) 冷凍：2017年18,475トン(2016年比83%)

④サンマと秋サケ（生鮮）



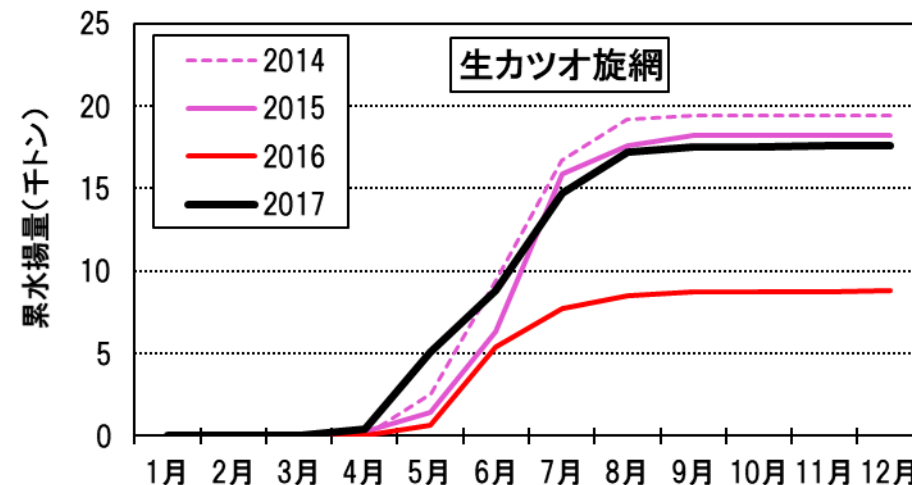
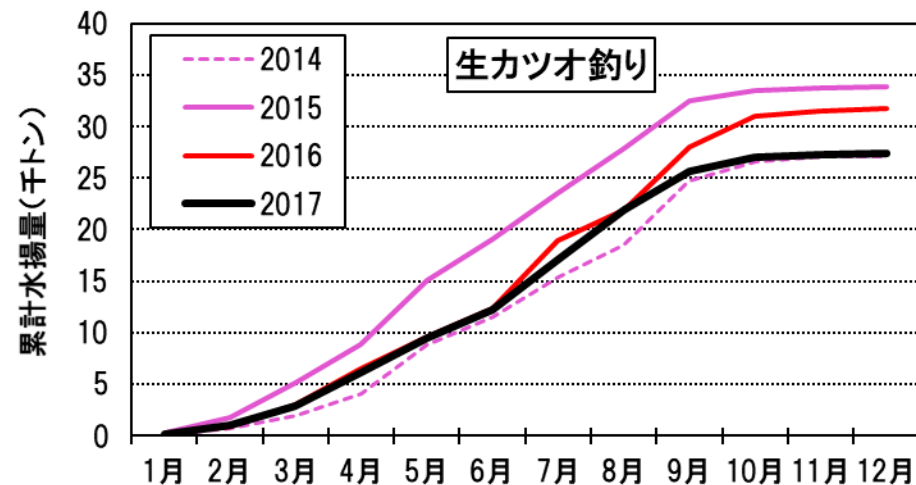
水揚量の減少が続く中、2017年は7万3千トンと不漁だった2016年の66%と、1980年以降で最低の水揚量でした。また、大型魚も少なく痩せており、近年の海洋環境の変化や外国船（含：IUU）の漁獲の影響などが懸念され、NPFCにおける検討に注視が必要です。



水揚量は2014・15年（約12万トン）から、2016年、2017年と大幅に減少しました。1990年代以降、北太平洋全体のサケ（シロザケ）資源は高水準にあるため、温暖化を含む日本周辺の海洋環境の変化の影響などが懸念されます。三陸は好調な出だしでしたが、後半に伸び悩みました。

2017年57,611トン(2016年比69%)

⑤カツオ（生鮮）



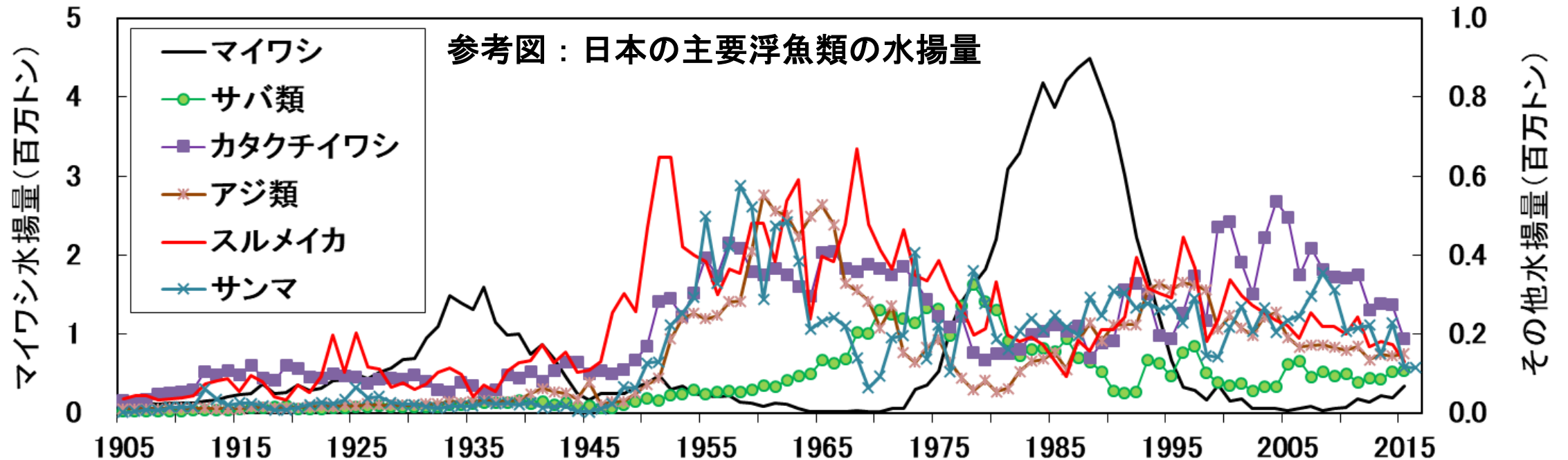
2017年はカツオの北上を妨げる伊豆諸島の冷水域が春先に見られましたが、5月には解消しました。しかし、竿釣りの水揚げ量は近年最低の2014年並みと低調でした。また、魚体も小型（1kg台）が多く、東北沖の漁場が例年より南側に形成される時期があり、戻りカツオが少ないなど、特異な年と思われます。旋網による水揚げ量は2016年は前年までの約半分でしたが、2017年は2014・15年水準に戻りました。2016年は旋網がキハダを狙ったためと思われます。中西部太平洋全体のカツオ資源は健全（親魚量はMSY水準を上回る＝乱獲状態ではない）とされていますが、日本近海への来遊量は減少しており、WCPFCでの検討などに注視が必要です。

釣り＋旋網 2017年44,935トン(2016年比111%)

釣り：2017年27,348トン(2016年比86%) 旋網：2017年17,587トン(2016年比200%)

水揚量まとめ

- 全国の水揚量の近年の推移はおおむね資源評価結果と一致していました。ただし、資源評価結果（動向）は同じ魚種でも系群により異なる場合があります。
- 近年はマイワシとサバ類（特にマサバ太平洋系群）の資源量と水揚量が増加する一方、カタクチイワシ・スルメイカ・サンマでは減少傾向にあります。このような状態は1970年代にも認められ（参考図）、魚種交替の兆候とも見られます。
- サンマ、カツオ、サケ、マサバ太平洋系群については、外国船（含：IUU）による漁獲や環境変動（カツオについては来遊状況）を注視する必要があります。



魚種・系群	動向 27年度	動向 28年度	動向 29年度
マイワシ太平洋	増加	増加	増加
マイワシ対馬暖流	増加	横ばい	横ばい
カタクチイワシ太平洋	減少	減少	減少
カタクチイワシ瀬戸内海	横ばい	横ばい	横ばい
カタクチイワシ対馬暖流	減少	横ばい	横ばい
マアジ太平洋	横ばい	減少	減少
マアジ対馬暖流	横ばい	増加	増加
マサバ太平洋	増加	増加	増加
マサバ対馬暖流	横ばい	増加	増加
ゴマサバ太平洋	横ばい	減少	減少
ゴマサバ東シナ海	横ばい	減少	横ばい
スルメイカ秋生まれ	横ばい	減少	減少
スルメイカ冬生まれ	減少	減少	減少
サンマ	横ばい	－	
カツオ中西部太平洋	減少	－	
サケ(シロザケ)日本系	横ばい	横ばい	

【参考】
2015～17年度（平成27～29年度）の主要浮魚類の資源評価結果：資源の動向

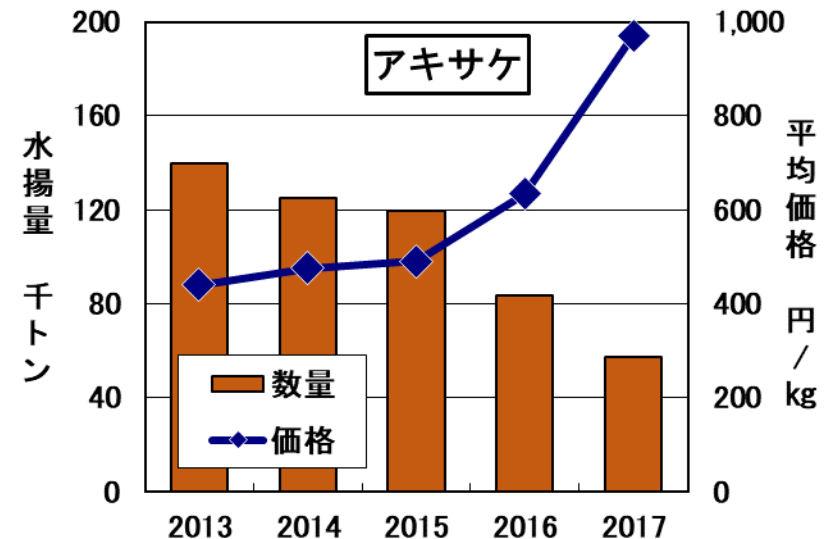
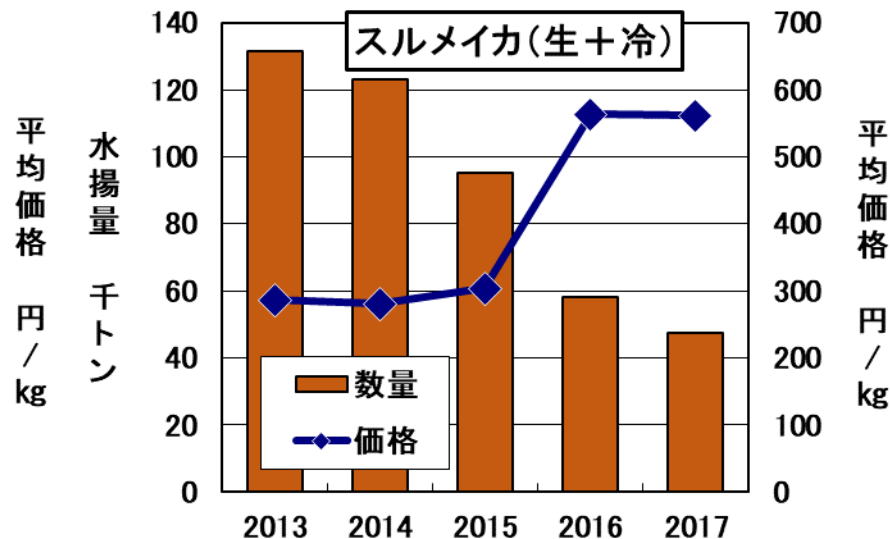
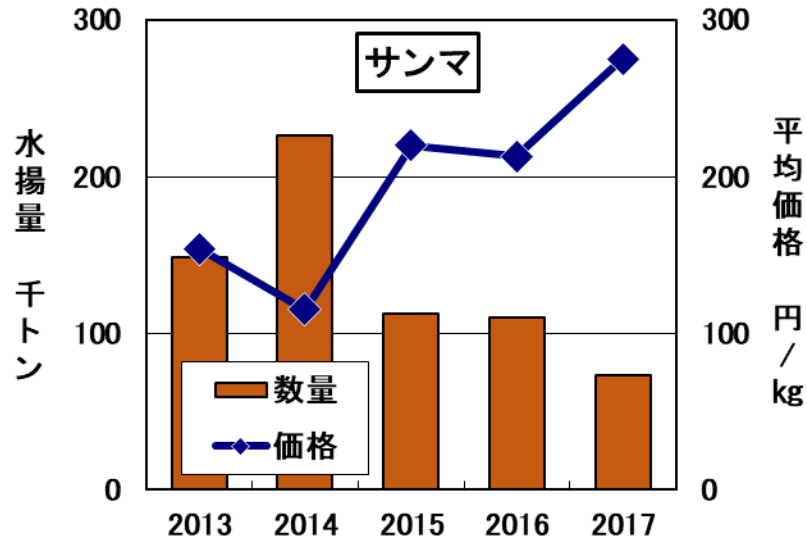
系群：資源の変動単位 遺伝的に他の生物集団と区別できる集団、あるいは遺伝的に区別できなくとも、産卵期、産卵場、分布、回遊、成長、成熟、生残など、独自の生物学的特徴を有する場合が多い。

動向：資源量（資源量指数、漁獲量）の過去5年間の推移から「増加傾向・横ばい・減少傾向」に区分したもの。
注：すなわち今後の予測ではない

出典： <http://abchan.fra.go.jp/>

Ⅱ. 2013～2017年の主要浮魚類の水揚量と価格の動向

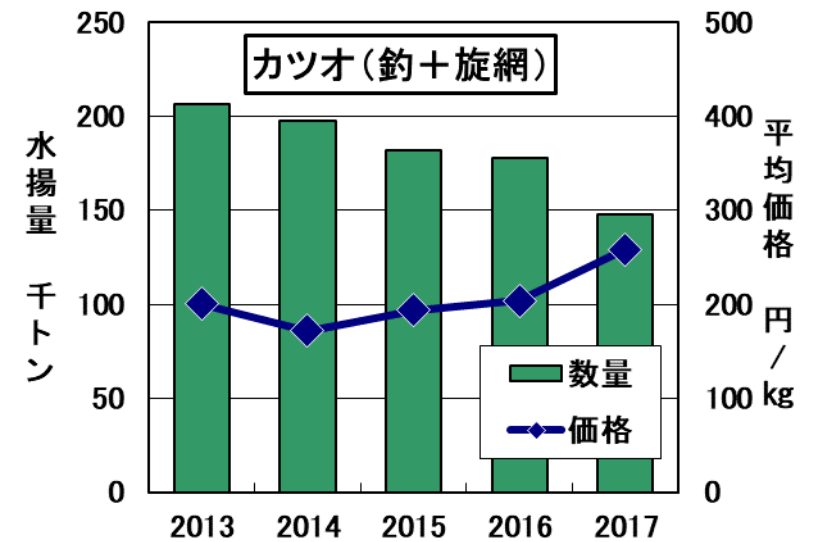
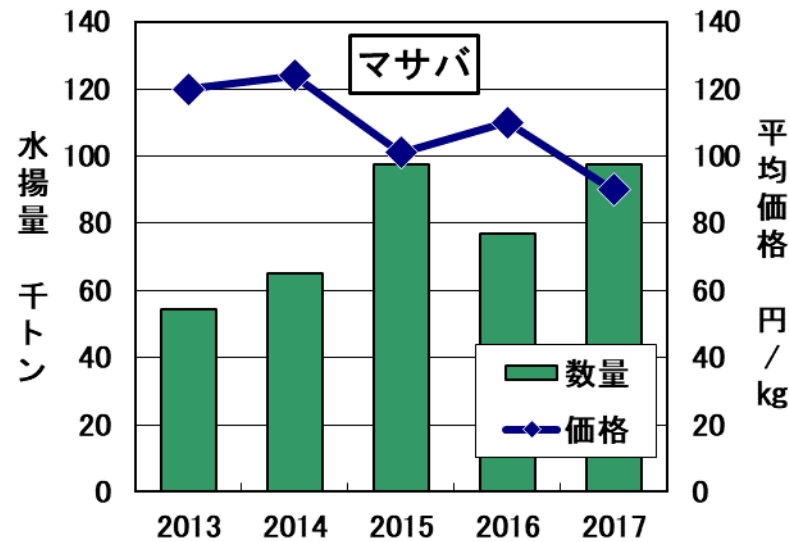
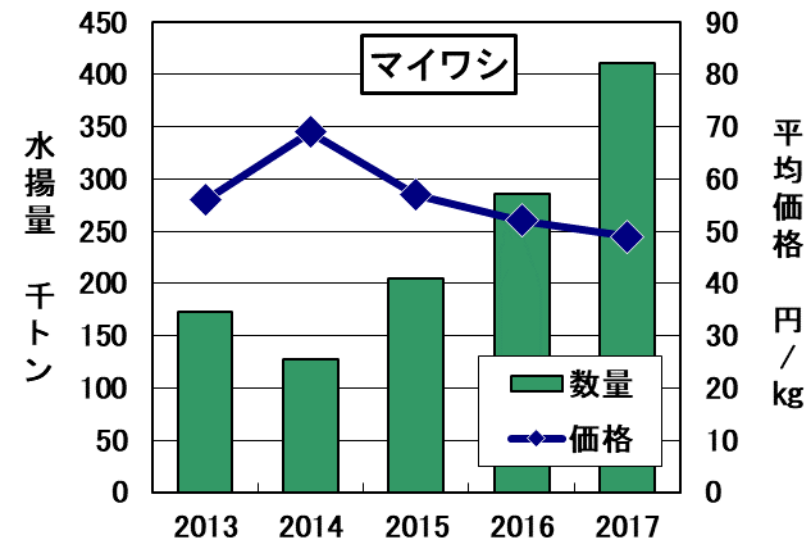
①水揚量の急減に対応し価格が高騰した事例



サンマ・スルメイカとも水揚量が近年減少し、在庫量も減少したことに加え、外国産原料の確保も限度があるため、価格は高騰した。加工品の製造を中止した業者も（サンマ缶詰、スルメ塩辛等）。

17年は不漁が影響し、雌Bブナが10月には例年の2倍の1800円/kgに高騰。イクラ製品も例年の6割高の8千円/kgで、正月用品に影響。

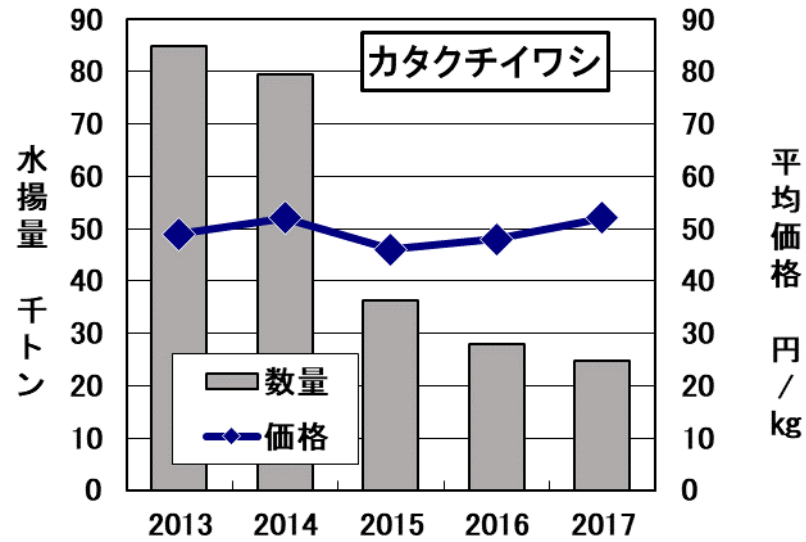
②水揚量の増減に価格が連動する事例



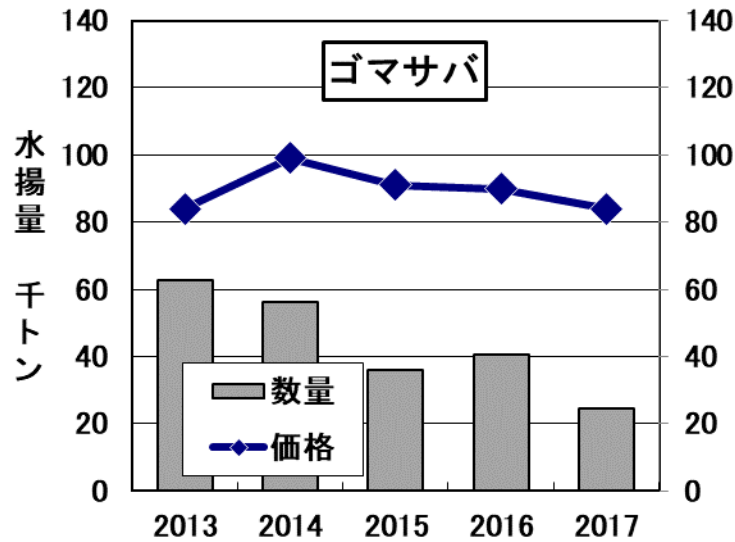
マイワシは近年水揚量が増加しているが、2017年の価格はあまり低下しなかった。この理由は、2017年は比較的大型魚が水揚げされ、不漁のサンマに代わる加工原料として利用されたことに加え、餌（フィッシュミール）の原料として需要があったと考えられる。

バンコク相場高騰の影響で、国内の鰹節原料も高騰し、鰹節製品の値上げも話題となった。

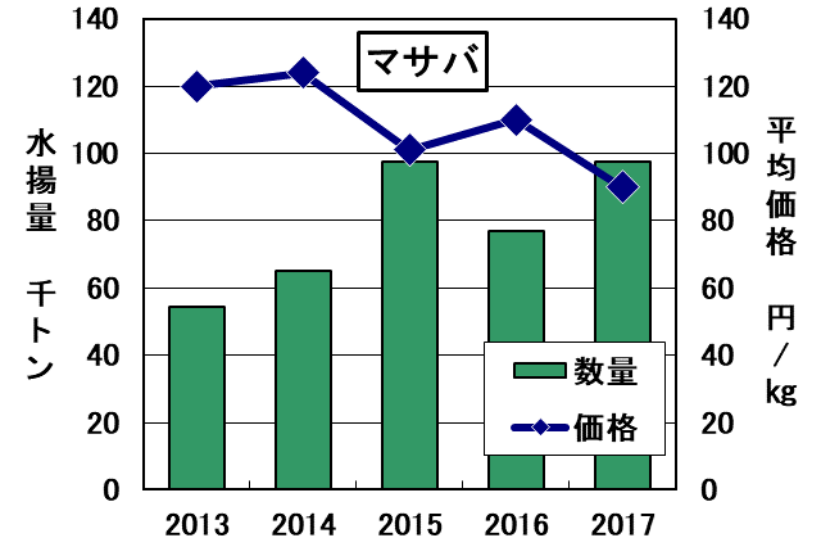
③水揚量の増減に価格が連動しない事例（マサバは参考）



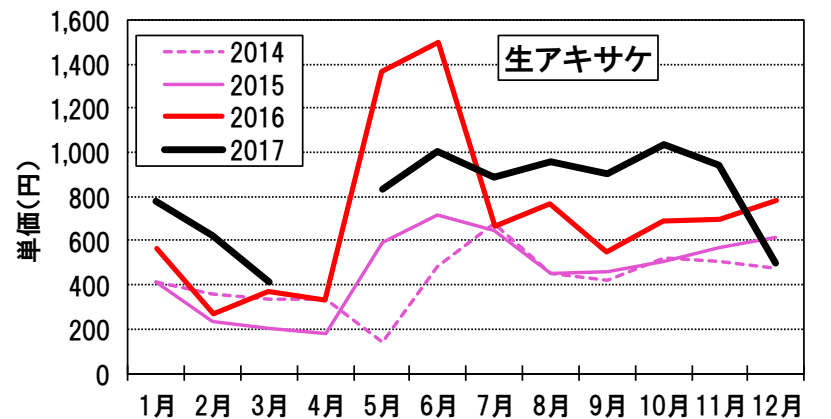
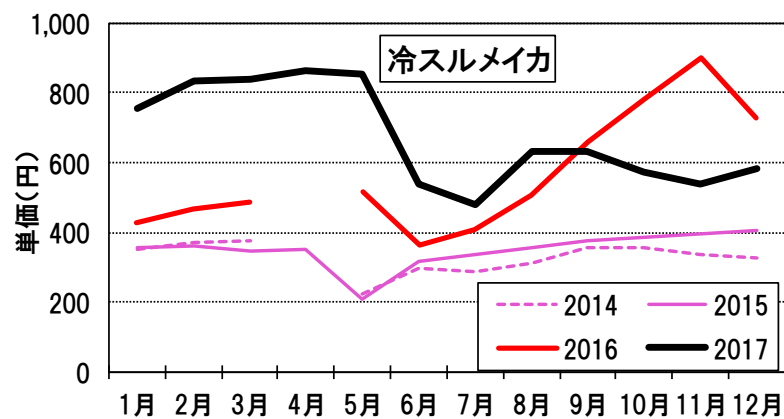
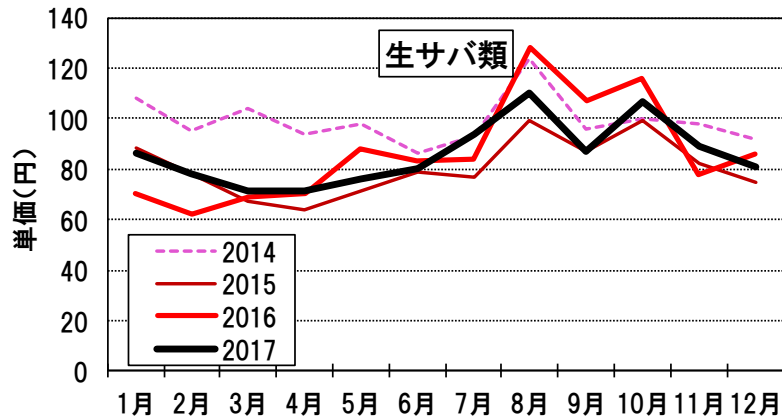
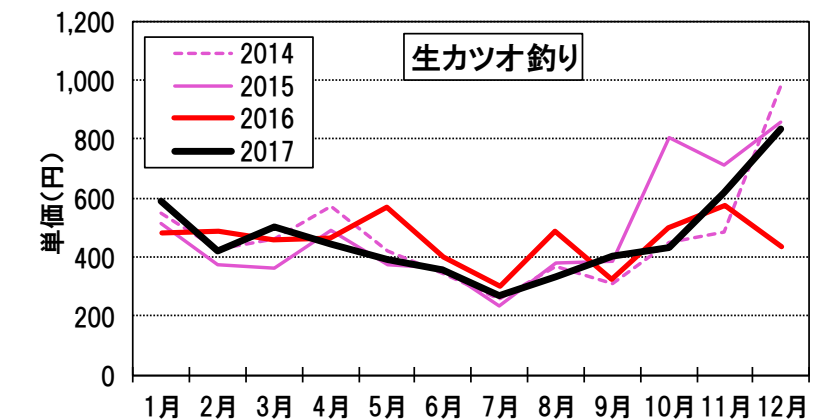
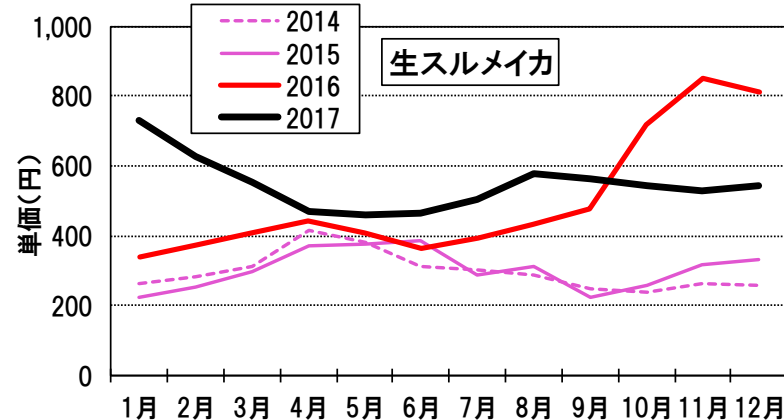
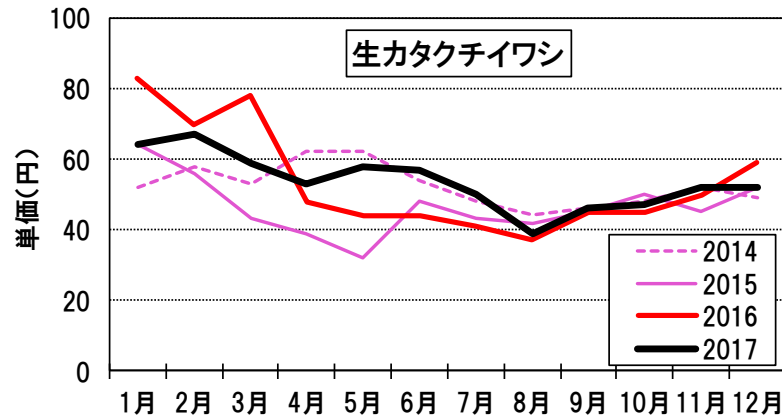
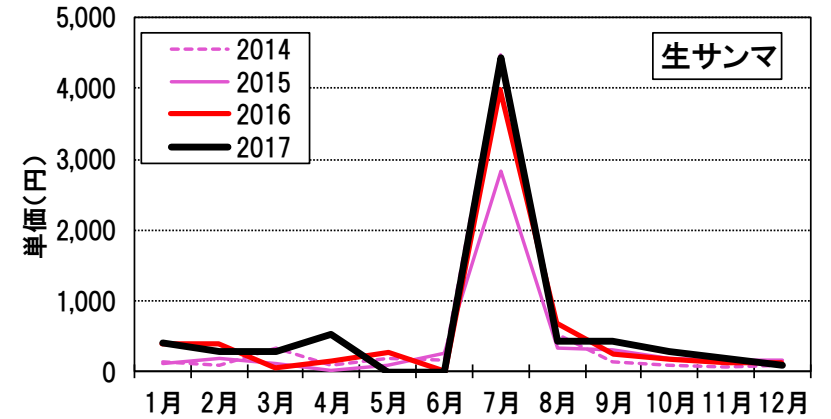
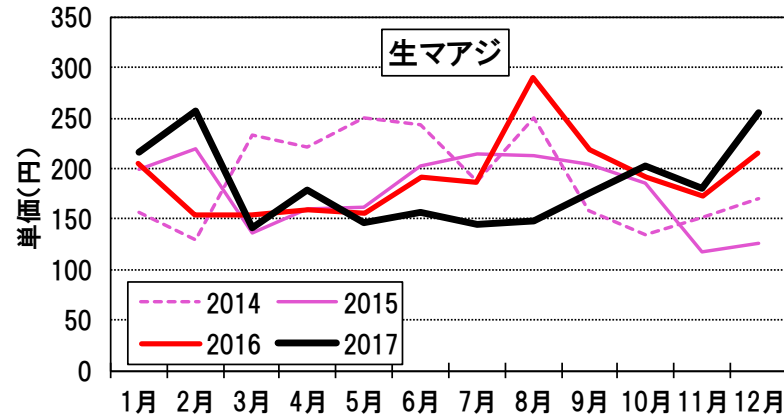
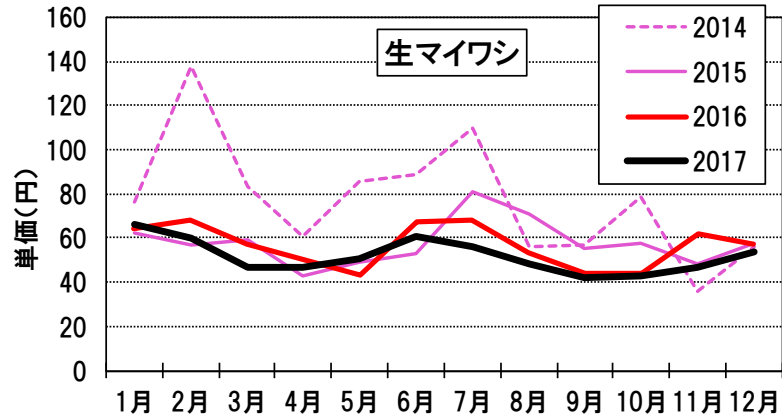
カタクチイワシの全国平均価格は変動が少ないが、カツオ釣りの活餌は供給不足で高値となり、その確保も困難であった。



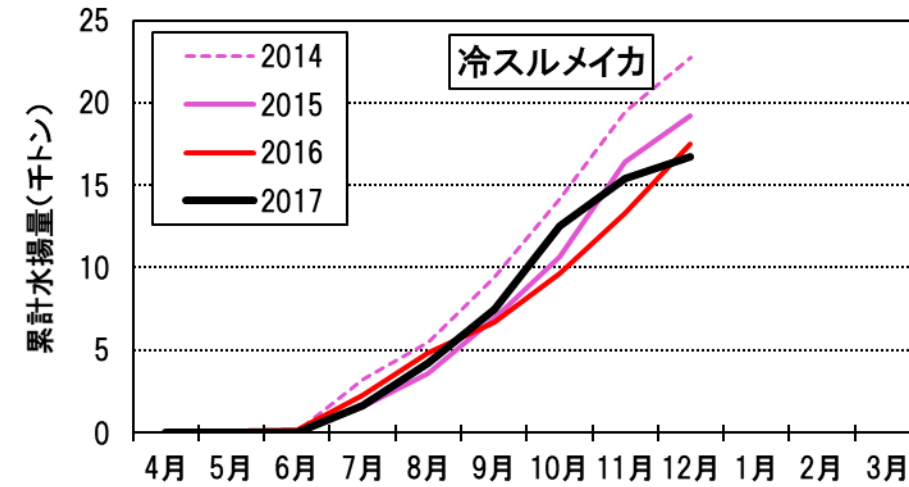
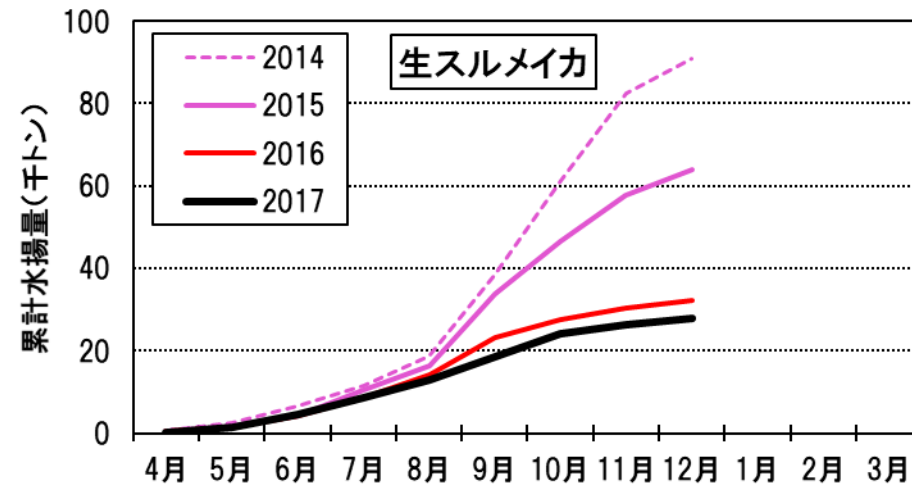
ゴマサバは大型魚の生鮮利用もあるが、小型のゴマサバの多くは餌用・鯖節用であるため、マサバより単価が低く価格変動も小さいと思われる。



【参考】 主要魚種の産地単価（円/kg）



スルメイカ（生鮮と冷凍：漁期年）



【参考】 漁期年で見た場合